

例・集会スケジュール

- 9/21(日) 強歩 長峰-杣谷峠-宝塚
当日阪急六甲 8:30 CL片山
- 9/24(水) 保壘岩 R.C.T.
前夜阪急六甲 20:00 CL田中
- 9/28(日) 雪彦山 R.C.T.
詳細追発表 CL田中
- 10/5(日) 月見コンパ(油コブシ)
前夜阪急六甲 19:00
CL幸内、片山
コンパ後5日裏地獄谷-石楠花
谷-アイスロード
- 10/10~12 石鎚山 詳細未定 CL星野
- 10/19(日) 不動岩 R.C.T.
前夜国鉄宝塚 20:00 CL田中
- 10/26(日) ボッカ 菊水-摩耶山
当日平野 8:30 CL幸内
六甲合同登山
詳細未定

委員会 10/1(水) 19時 神戸登山研修所

集 会 10/8(水) 19時 神戸登山研修所

月

報

神戸山岳会

No. 78

50. 9. 10

発行 神戸山岳会

神戸市生田区中山手通1丁

目105の9 前田方

編集 星野・片山・長島

50年度役員

委員長 岸本

副委員長 岡崎

運営委員

企画：釜本、内藤正 三浦 宮本 田中正

装備：宮本、幸内

庶務：萩本、片山

会計：萩本、片山

月報：星野、片山、長島

岳連役員

理事：岡田

評議員：岸本、武田

分科会

技術：梅原

遭対：武田

海外

山の集い：武田

リーダー会

梅原、野上芳、野上博、内藤正、立岡、

三浦、武田

正会員推薦

星野、幸内、田中正裕（5月付）

長島、片山（10月付）

例会報告

6月8日

西山谷～番シヨウ尾根

待望の新人歓迎登山が行なわれました。10名の新人の方が参加され、OBの方もたくさん来られ20名位の賑やかな山行になりました。この日は、春日和の良き歓迎登山で、新しい方との交流も成され、のんびりした山行でした。

6月15日

比良山沢登り 八幡谷

メンバー 内藤₂、野上₃、井上、長島、鮎

記録 鮎

6月8日の新人歓迎登山に参加して以来、神戸山岳会に入った。そして、今日が初めての例会だ。14日夜、加茂川の川原にて野宿。翌朝、バスに乗り、梅の木町にて三舞谷、貫井谷、八幡谷の三班に分かれて登る。山の頂から流れてくる川に向かって登っていく。ザーザーと流れる水が、何もかも洗い流してくれるように、とてもすがすがしい。

たびとわらじをはいて、滑る石の上に、足を動かさず、一步一步置いて歩いていく。先輩たちの

言う通りにやるが、なかなかうまくいかない。何度も滑っては水にはまり、石にぶつかり、足の裏に吸板がついていたらさえ思う。一度崖に登るとき、足が滑べり、岩にあごをぶつけながら墜落し一瞬もうだめだと思ったが、先輩が下ですぐに止めてくれ、助かった。自分の血を見て、目まいがし、だめかなと思ったが、みんなに応急手当をもらい励まされてファイトが出てきた。その後いく度かの難関はあったが、そのたびに歯をくいしばって、みんなについて行った。あの落石する坂を、木のつるだけで登ったこと、大木の倒れている所を、かき分けて登ったこと。そして、頭上に武奈ヶ嶽の頂が見え、仲間の姿を目のあたりにし、急いで登り上がった。一人一人の顔を見たときは、何とも言えない気持がこみ上がってきた。頂上から見た風景、感激を後にして下山。

今日は、自分自身にとって大きなものを勝ち得た。ささいであるが、登山のすばらしさを感じた。登山というスポーツは、危険が多く伴うのだから、あそび半分の気持ちではできないものだ。それに山行中、日頃の準備、基礎体力の養成の必要性を強く感じた。一つ一つの困難に耐え、それ乗り越え頂上へ登っていく。この山登りの過程において、およそ人生の縮図のように、多くのことを学びとることができる。

今日、私がこんなに大きな収穫を得ることができたのも、諸先輩のおかげです。

今、私は登山に対して大きな期待を持っています。以後もどうぞよろしくお願いします。

6月15日

比良山沢登り 貫井谷

記録 藤田

メンバー 野上1 内藤1 星野、幸内、田中、藤田

前夜は河原で星を見上げての雑固寝、何とも形容しがたい眠りになった。

翌朝、バスからの展望はガスが発生していて登りがうっとおしくなる。貫井谷入口でわらじにはきかえ、さあ出発。4年振りにはいたわらじも心地よくボンボンと石に飛び移る。だんだん滝も増え、皆、慎重な顔をしてくる。でも若さも手伝って、トップは水量の多い所をねらってどんどん進む。おかげでズブぬれ、冷たさと汗とがごっちゃになり雨の中を歩いている様だ。30分ごとに1本とり、むつかしそうな滝の下で昼食、晴れ間も見えタオルを腹巻きにして冷たさをとり食料にありつく。その滝は巻き道を取り上部へと急ぐ。だんだん水量もなくなり先が見えてくる。結局滝はいくつあったんだろう。もっとも、数えている余裕などなかったけど。

武奈ヶ岳から見た沢は、殆んど真下に安曇川が見え、すごい急勾配なのにびっくりする。内藤さ

人達のパーティを待って下山する。尾根歩きはさわやかだ。途中、三浦さん達のパーティと合流して総勢16名。記念撮影する。下りは、走って降りる。

以下、注意すべき点、拾ってみました。

1. 傾斜が緩い所はホールドが少なく、又こけでつるつるしているので登りづらい。
2. チムニー状のところではホールドがないときはフリクションをかかせろとの事だが、まだまだ慣れないせいもあるけど、苦しかった。
3. 最初にとっつきにくそうだなと思ったら落ちた。気持ちを引き締めて登らねば。
4. 滝を登り終えたあと何でもない様な所で滑ってしまうので、小休憩まで慎重な行動をとる。
5. どうしても行きづまったら、無理しないで引き返す。

以下、コースタイム

6月14日	PM8:30	十三駅集合	PM9:40	河原町駅着
6月15日	PM9:40	河原町にてバス乗車	AM9:00	梅の木着
	AM9:00	貫井谷入口着	PM1:45	武奈ヶ岳(1214m)着
	PM6:23	比良駅乗車	PM8:00	大阪駅着

以 上

7月6日 百丈岩 RCT

前日より、お化け屋敷に泊まる。翌朝、あいにくの雨、梅雨期だからしょうがない。昼近くに雨も止み、こそって東稜、西壁を登る。

内藤④ 宮本、幸内、三浦、田中 内藤② 前田、鮑、岩崎、長島、桂正、片山

7月20日 小豆島拇岳 R.C.T.

田中(亨)、野上①、内藤②、宮本、三浦、野上③、田中(正)、幸内、堤、鮑、井上、内藤②の友人、白木、魚谷、星野

前夜中突堤より関西汽船の坂手行に乗船し、しばし夜の船旅を味わう。坂手で仮眠後始発のバスにて橋峠に着く。初対面の拇岳は眠気を忘れさせるに十分な迫力を持ってそそり立っている。野上

① 内藤②パーティダイレクトルート、野上③、井上、魚谷パーティ、田中（正）、星野パーティ
幸内、宮本パーティ、三浦、田中（亨）、他新人全部のパーティ計4パーティが一般ルートをワイ
ワイガヤガヤ賑やかに登り冷汗と脂汗と普通の汗とで頂上に着いた時はみな脱水状態となり目の前
の大海原がなんとおいしそうな水に見えたことか！

帰りは宮本さんの岩登り腕前もさることながら、ヤスの腕前に感心させられました。獲物を手に
水から上がる姿はとて山の人とは思えませんでした。 (記：星野)

7月27日 ポ ッ カ 山寺尾根～長峰

岸本、田中亨、三浦、岩崎、長島、片山、鮑

日中の強い日射しを避け、前夜から杣谷堰堤に泊まり込み、朝7時から出発する。

4ピッチ、ほどよい疲労をとめない、摩耶山掬星台に出る。ここまできたらしめたもの。産湯の井
戸で水をいっぱいつめこみ、くもの巣をはらいながら、桜谷に行く。

徳川道に合し、広い道幅に余裕を覚える。ここで一人熱を出したので大休止する。一時間ほどす
ると、岸本さん、田中亨三さんが来られた。岸本さんは杣谷峠、田中さんは山寺尾根を来られたそ
うである。当日集合の変更の連絡がうまくつかず悪いことをしてしまった。結局、病人の様子が思
わしくなかったので、ポッカはここで中止となる。

夏山合宿前のポッカにしては、少し寂しいメンバーであった。

夏 山 報 告

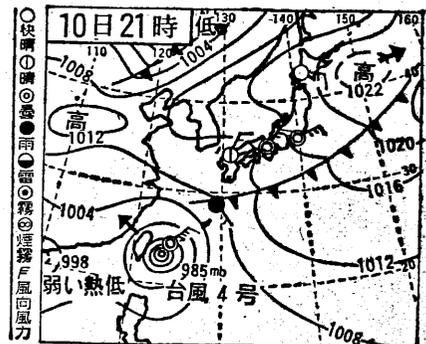
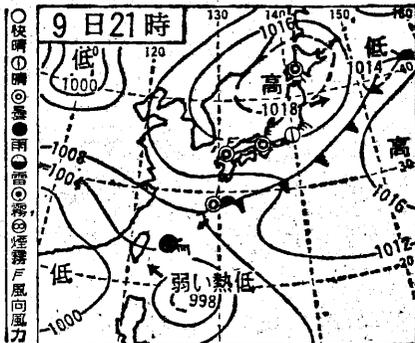
昭和50年度夏山合宿報告

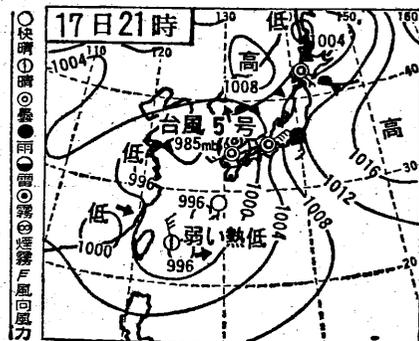
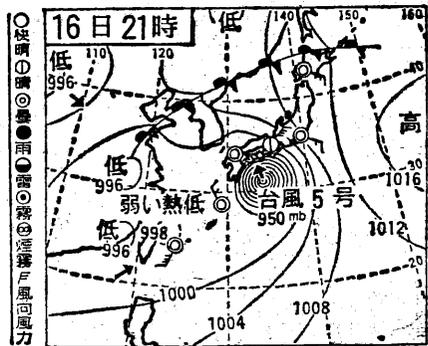
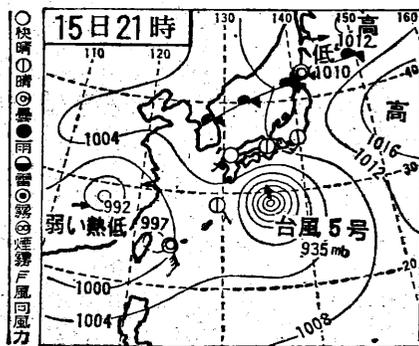
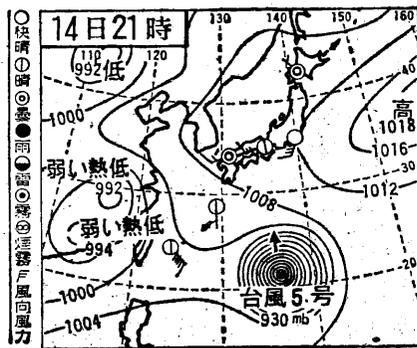
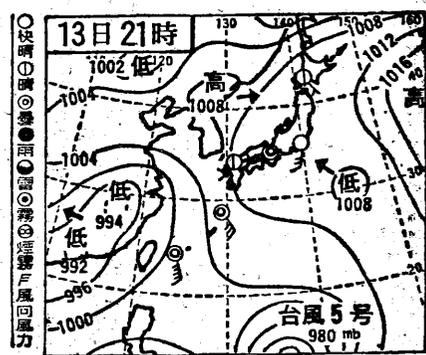
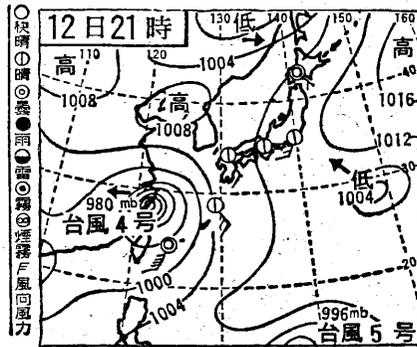
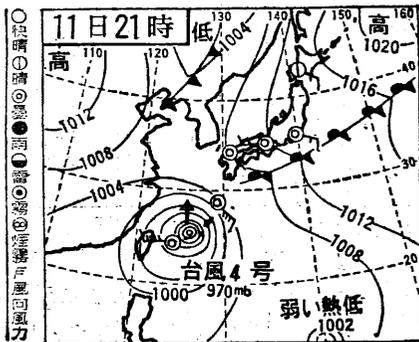
昨年に引続き今年度の合宿も剣岳が選ばれた。剣岳はその岩と雪とにより何度行っても我々に新
たなる感動と憧憬の念を抱かせるのに十分である。入山コースとしては新人会員の夏山全般に渡

る訓練の為、太郎兵衛平-薬師岳-剣岳のコースに決定された。8日間におよぶ幕営生活及び行動は昨今ハイカーに好まれている北アハイキングとは無縁のアルピニストのみが知る楽しさと苦しみがあった。

日 程 記 録

- 8月 9日 大阪発
- 8月10日 富山-有峰口-折立-太郎兵衛平-薬師峠
- 8月11日 薬師峠-薬師岳-スゴ乗越-五色が原
- 8月12日 A班 五色が原散歩
B班(前田・堤) 五色が原-室堂下山
- 8月13日 五色が原-立山-剣沢
- 8月14日 剣沢-長次郎雪溪-三ノ窓
後発隊 馬場島-池ノ谷-三ノ窓
- 8月15日 新人 三ノ窓雪溪にて雪上訓練後剣岳本峰往復
中堅 ジャンダルム及びチンネ登攀
- 8月16日 新人 長次郎雪溪よりハツ峰上半縦走
中堅 チンネ登攀
三ノ窓-長次郎雪溪-剣沢
- 8月17日 剣沢-室堂下山





参加者

CL 三浦靖男 S.L 宮本朋之

食糧 幸内義孝 桂正弘 堤康正 片山富美子 星野辰也(記録)

装備 田中正裕 前田正英 鮑碧琴 岩崎敏明

後発隊 岸本光弘 田中享三 内藤正司 間島敬介

剣で感じたこと

照りつける太陽と雪と岩のコントラスト、夏の剣は今年も我々をその大きな内懐に導いてくれた。

“その山行は、綿密な計画と、良きチームワークによりほぼ完成される”と昔から言われるように今回もその例にもれない合宿であった。

夏山は新人にとっては全ての山行のステップであり、アルピニストとして成長しうる基礎である。試練とも言ふべきこの合宿に耐えることこそ強い肉体と精神を作り出すものである。二年会員にとっては、よき復習となり、また基礎技術の焼き入れも見逃がせないものとなる。

初めての重荷やテント生活、雪溪訓練……………これは日々のグレンデにおけるトレーニングに結びつくものであるし、今日のように登山が発達してくるにつれてスポーツ的である以上、毎日のトレーニングも必要なものとなってくる。これからも、神戸山岳会の会員として活動していく以上、より高く、より困難を目指し、オールラウンドなアルピニストに自らをきびしくすることが新人会員の課題となるであろうし、2年会員以上は、より新しい登山技術・活動の習得に目を向ける必要が生じてくる。そしてそれを自分の血、肉とする精神力も必要となる。そしてそのきびしさを耐え抜いた時にフリーの岩の感触が、山の懐でラテルネの火に心をなごませんとする時が、自分のものとなるであろう。

大きな山々を、青春の良き道場として自らの精神を錬磨しようではないか。

“マナーリ打開”

(鬼の三浦)

チ　ン　ネ　の　印　象

田　中　正　裕

三ノ窓BASEに入ると、初めて見るチンネの全容に、ただ圧倒させられ、そして息の詰まる様な緊迫感におそわれた。しらずしらずのうちに、口数が少なくなってしまうのが、自分でも感じられた。先輩は平然として、登攀ルートの説明をしてくださるが、僕は、ただ茫然とチンネを見そして、スケールの大きさに飲まれ、チンネの岩壁が恐ろしく押し掛ってくるのを感じた。明日、あのチンネに登るのかと思うと夢の様でもあり、また逆に恐怖感が胸の底から湧いてくる。
“初めての本番だ！”明日の良き登攀日和を祈って、チンネを仰ぎ見る。

チンネジヤンダルム　PI

パーティー　星　野・田　中

8月14日、朝、内藤さんやOBの方が来られる。8時ごろまでに、PIに登ろうと、みそ汁だけを、すすり、7時ごろハイ松テラスから三本クラック(2)のルートに取り付く。薬師岳からの縦走の疲れで、思うように動かない身体に鞭打って、1P目のクラックに手足を必死にねじ込んで強引に抜ける。1P目でAチムニーから登って来られた宮本さん、幸内さんらのパーティーに合流する。2P目、20m位のリッジを行くと、そこから確保しながら仰ぎ見るPIは、絹雲の様なガスが勢よく流れる紺碧の空に鋭く突いており、100m位のPIをもっと高いものの様に錯覚させられる。3P目、三ノ窓雪溪側のもろい高度感の満点な所を登ってPIに立つ、文献によるとチンネ偵察にはPIがよいと書かれていたことを思い出す。僕の立っているPIより3倍以上もの高度があるチンネは、PIを比較にならないほど小さく感じさせる。

約1時間半位。



鏡岳ハッ峰

チンネ左稜線下部

パーティー 星野 田中

8月14日、13時、中央チムニーを登ろうと、取り付きに行くが、2パーティー待っているうえに、前が支えている為、時間切れの恐れが多分にあり、そのうえに、人意的な落石が多いと思われる為、あきらめる。雪溪に下ると左稜線を行く内藤さんと宮本さんらのパーティーの姿を4P目位の所に見る。中央チムニーが支えている事を話すと、登って来いとサイン、1時半ごろ、左稜線に取り付き、速く先行パーティーに追いつこうと、一生懸命に登る。2P目位から、ガスが掛かり全く見えなくなる。5P目位のピナクルの手前で、ピナクルを抜けるのか、チムニー状のクロアールを抜けるのか迷ったがコンテでチムニー状の所を抜け、ハイ松のリッジに出る。8P目位で内藤さん、宮本さんらのパーティーに追いつく。T5では前が支えている為、3時間も待っておられるそうである、この分だと、上部を抜ける前に暗くなると思われるので、明日の天気を祈って、クレオバトラニードルの肩の方へトラバースして急な雪溪を登り、BASEに戻る。T5まで2時間位。

中央チムニー・左稜線上部

パーティー 星野 田中

朝焼がチンネを金色に染める。後立山連峰は、すべてのピークに綿をかぶせた様に厚い雨雲が直接的に垂れ下がっているが、天気はなんとか持ちそうだ。昨日やり残していた中央チムニーを3Pで抜け、中央バンドをトラバースしてT5に着く。先行を行く内藤さん、宮本さん、幸内さんらのパーティーは、すでに上部の1P目の核心部を登っていた。我々のパーティーも後を追って取り付き。今日はガスが掛かっていないので、両側にスツバリと切れ落ちた薄いチンネの上部は、思わず岩を持つ手に力がこもる。後ろを振り返ると、近藤岩まで吸い込まれそうである。2P目を抜けるとチンネの頂稜に達する。八ツ峰の縦走パーティーがクレオバトラの肩あたりを登ってくるのが見える。おそらく内藤さんらのパーティーは、もうチンネの頭に着いていることだろう。みんなに会おうと頭に急ぐが、10m位のギャップと八ツ峰側と三ノ窓側にスツバリと切れ落ちたナイフエッジとの連続は思っていたより長く、14時ごろチンネの頭に立つ。

装 備 係 と し て

田 中 正 裕

装備表の作成の段階で、遅れたことはたいへん申し訳なく思います。グランドシートの忘れ物は最終チェック係の当方としてお詫びいたします。石油の量は1日当り約1.7ℓの計算で7日間として12ℓ、それにプラス、ラジウスを満タンにして、最後には4ℓほど残りましたが、ラジウスを十分に使用する事が出来、また幕営地でのゴミの焼却の際の燃料に使用して、すべてを処分でき、石油の量は適量だったと思います。ラジウスを組立てる時に、チューリップの下の鉛のバッキンがフタのねじにくい込んでしまい、ラジウスが一台使用できなくなってしまいました。ラジウスのねじはムリをしないように心掛けなければなりません。小物がよく行方不明になります。たとえば茶こしや包丁それにハリガネ、マンドリン等、これらのものは、炊事用具の小物とメタやマンドリン、バッキン、ハリガネ等の小物袋を2つ作り、その袋に何が入っているかを明記すれば行方不明がなくなり、スピーディにことが運ぶと思います。次回よりそのようにしたいと思います。装備係として行き届かなかったことを反省いたします。

食 料 係 感 想 文

幸 内 義 孝

1日1合の割でゆくと、米は多すぎることがわかった。それよりコップエルでいくら炊けるかということだ。重たいが生ものを多くもって行きたい。寿司の素、釜メシの素等は10人前なら12~13人前入れると調度よい味になること、玄米茶でなく緑茶にすること、肉の持って行きよう等考えた。

作り方を研究したい。皆がよく知っていたので自分は何もしなかったけど自分からやれたらと思った。

チンネ登攀、中央チムニー、左稜線上半、思ったよりむつかしくなかった。ハングしている所は別として左稜線のつめは両端とも切れていて思わずヒヤッという声が出た。ほとんどトラバースぎみのような気もしたし、右を見て宮永さんが見てくれてる、がんばらにゃとも思った。宮本さんが確保してくれていたので安心して登れた。トップでも行けそうな気もしたが、やっぱりまだまだルートファインディングが出来ないような気がした。よくルートをまちがえたもの。

チンネジャンダルム

最初の一ピッチパッと見てコンテだと思い途中迄ゆくとハーケンが入っていた。アレッと思ったがそのまま上へ行く。この辺で確保してくださいといったがビレイピンがない。よく考えるといちばん下から確保するのだった。途中迄ゆき、交替した。本に載っているチョックストーンのようなものもなかった。あまり本はあてにならないと思った。

2ピッチ目は星野さんトップ、くずれそう、ハーケンきいてないといいつつ登る。次の次は僕の番と思うと胸がどきどきする。星野さんのいった通りくずれそうだった。でも下からいろいろ指示してくれたので行けた。

池の谷を見て

宮永さんのお墓参りに行って、黙禱をして、岸本さんが13年前といわれ僕の年を勘定した。頭から水をかけ洗って花をさし、宮永さんもうれしいだろうと思った。そして登った所の説明を聞く。でっかいでっかい、アレがドームという、KAC小唄によく聞いていたが、すごく大きくチンネが小さく見えた。ドームの頭で阿波踊り、なんて出来そうもない。ワーと声を出して一こと大きいなあ。

最後に反省

- 雪は怖い滑べるから、岩は怖い落ちるから
- 食糧係は、ぐちこぼす、文句言われるから
- まだまだ雪と岩は好きになれない。なぜそんな危険な所へ行くのだろうか。自分にもわかんない。お花畑が一番いい楽しい。

夏山合宿

鮑 碧 琴

期待と不安で、胸をわくわくさせながら参加した夏山合宿。生まれて初めての3,000m級の山行、剣岳、そして有意義な団体生活。この合宿を通じて私は非常に貴重な経験を得、また多くのことを学ぶことができた。そして反省すべきこともたくさんあり、今後の課題として残る。こんなにも有意義な経験が得られたのも、リーダーの三浦さんと宮本さん、その他多くの先輩達の多方面にわたる指導があったからこそ得られた。自分一人の力では、決して得られなかったであろう。先輩に心から感謝します。

まず生活技術面では、登山で必要な生活技術：テント張り、ごはん炊きなど。私たち新人は何もわからなかった初日に比べると、日増しに一つ一つ覚え、しだいにできるようになった。私自身す

べての面で、完全にマスターできたというものではなく、これをステップとして、今後確実にマスターしよう。私がつくづく感じたことは、私たちは街に住み、近代化、電氣化された生活を送っている。ややもすれば、ボタン一つで体を使わずに何もかも解決されると思い込んでしまう。山で生活するとそうはいかない。自分たちの住まいから食糧まで自分の両肩でかつぎ、自分の両手で生活を創りあげていく。手が凍りそうな水で野菜を洗い、ごはんを炊く。こうした作業の中で、体を動かし、両手を使ってやり、ごはんを食べるのも苦勞しないと食べられないということを教えてくれる。生活を創造する無限の楽しみ、喜びがそこにはある。

もう一つ進歩したことは、以前に比べて山の生活に慣れたこと。しかし私は持ってきたものをみんな着ないと寒くて眠れなかった。夏山でこの状態だ。今後は序々に訓練して慣らしていかないといけない。冬山に備えよう。

登山技術においても、進歩があった。今まで登りを歩くときや岩登りのとき、かかとがすぐに上がってしまう。合宿中大部かかとが上がらずに歩けるようになった。私にとって最も大きな成果は岩登りの足の運び方、コツとカンなど、ある程度の進歩を勝ち得たこと。しかし、ガレ場、下りの歩き方はまだまだだ。技術面の課題としては、たくさんあるが、まず体力の養成、そして岩登りと下り、ガレ場、雪渓上の歩き方など、今後の例会で一つ一つ修得していきたい。

精神面においても反省すべきことはたくさんある。疲れたときにすぐに楽したいと思う。苦しみを耐えぬこうという意志が欠けている。三ノ窓で台風接近のため急拠撤退と決まって、長次郎雪渓を下るとき、私はまだ経験していない山の台風に対する恐怖感が高まり、とてもあせっていた。そのためアイゼンをつけて滑らないはずなのに滑ってとてもこわかった。突然何かが起きたときの心の持ち方、冷静さを養わなければならない。そして、登山がこんなにも、機敏な動作、冷静さを必要だと思わなかった。

私は、動作が遅く、何の手つだいもできなかったばかりか、先輩たちにたいへん迷惑をかけた。自分の欠けている面が、わかったので、それらを一つ一つ深く反省し今後、直していきたい。

登山はまた、大自然との触れ合い、斗い、調和であるような気がする。山の溪谷、雪渓、岩場、そして稜線や山頂からのあの雄大な展望は私の心を捕えて離さない。あの迫力感あふれる雄大な剣岳は、私の心に焼きついている。

合宿の一つ一つの経験をかみしめ今後の山行に励みたい。

夏山合宿

堤 康 正

満腹になった各々の重いキスリングを囲んで夜行列車を待つ雰囲気は、山岳会ならではのものである。しかし私にとっては初めての合宿、初日の集合の夜から緊張と不安が始まった。

次の日、有峰口からのバスで体調が最悪になったが、天気が良く、すずしい風で太郎までがんばれた。

山でのテント生活は始めてだったが、ワイ談、雑談、放歌どれをとっても山岳会に入った良さがあつた。あの時は、もっと放歌したかった。私はこういう交りが一番好きだ。

それにこの夜の星達は、1人でながめるにはもったいないほどきれいだった。彼女にも見せてあげたかった。

次の日は、太郎から五色ヶ原まで地図を見ると、時間も距離もとほうもなく長く、なんとかなると出発したものの五色へ到着した頃は、疲労と寒さで身体がどうにもならない寸前だった。やっぱり訓練不足が出てしまった。しかしこういう皆んながバテ気味の時も精神も体力もしっかりしていなければ、真の岳人と言えないと後で感じた。

要は、何事も努力なのであろう……………

3日目は、早くも一足先に下山の日であった。美しい五色ヶ原を後にお疲れの中、室堂まで案内して下さった宮本さん、三浦さん、幸内さんはじめ、合宿に参加された皆さん本当にお世話になりました。この紙面をかりまして御礼申し上げます。

これからの私の山行がどういう方向へ行くかわかりませんが、この合宿の経験を血とし肉とし、その場その場の自己の精神確立を大切にしていかなければと感じています。

∞

片 山 富 美 子

8月17日午後6時32分、我家に無事生還。しんどうて、しんどうて、『生きて帰れるかしら』と思った。

神様、無事に、バテル事なく、迷惑をかける事なく、自己嫌悪になることなく、9日間をもし私に、過ごさせてくれるなら、いい娘になります。親孝行します。一生懸命働きます！ 私の一生で一番長かった9日間は私の願いが聞き入れられたか、満足のもとに終了した。景色なんぞもそっち

時折りガスが掛ってきて、池の谷を象徴する言葉通り、井戸の底にいる不気味さを感じた。R4の岩壁をじっくりと見ながら少し上がるとR2からの雪渓が分かれている地点にくる。もうすぐ三の窓と嬉しくなり、足も早くなる。いやなガレ場をすぎ三の窓に着く。(14時30分)着いているはずの本隊がいない。ガスに包まれあっちこっち探してもいない(18時頃まで探すがもうあきらめた。)4名でツェルトの内に入りビバークすることにした。食糧もラーメン4ケを食べて早ばや寝る。8月15日ガス晴れて三の窓雪渓側下にテントを発見残念だった。予想しない場所にあった。でも苦しいビバークを一日味わった事で良しにしよう。

個人山行記録

春山合宿 槍ヶ岳

田中正裕

富山から猪谷へ、猪谷から神岡線に入ると、列車の左の山はすべてが灰色に崩された鉾山である。その鉾山に朝もやがかかりなんと無気味な様相を我々に与えている。

神岡からバスで新穂高へ出発。約1時間の道のりである。この辺りでは、桜と梅がいっしょに咲き緑の山に一際目立つ。

槍見温泉付近からは、バスの中より錫状岳の岩壁が柱を重ねた様に見える。新穂高へ7時50分。快晴である。笠ヶ岳のルンゼや岩壁には朝日が当たり、まばゆい程に輝いている。新穂高を8時10分出発、道端にはフキノトウやツクシが多く芽を出している。9時10分穂高牧場、西穂のピークが覗いている。穂高牧場から上の道に行く。この辺からはちほち雪が残っている。川原の林からキレットが正面に見える。10時10分白出沢、広い川原だ。大きな岩がゴロゴロである。雪解水で顔を洗い、水をいっぱい飲む。12時10分チビ谷、谷は雪でいっぱいである。小さなデブリがある。山学同志会の告示板があった。それによるとザックを上から落としたので、見つけた者は知らせてほしいとの事である。我々はその告示板を後に槍平へと急ぐ。12時55分滝谷合合に着く。『雄滝は大分埋っている』と野上さん。

深いルンゼには、雪が溜り、日が当たっていない。暗く濡れたような滝谷は悪魔が出てきそうな神秘さを持ち鳥もよせつけないようである。ドームが一際高くそびえている。

1 4時15分槍平に着く。槍平は奥丸山と南岳にはさまれた雪の盆地であった。我々の天幕は冬期小屋からいちばん離れた所に張った。他のパーティーの天幕も5張程度でひじょうに静かである。20時明日の登山日和を願ってシユラフに入る。

2日 3時起床 星が出ている。

「天、我に味方せり」である。有難い。5時15分、槍平(B a s e)を出発、晴れ、少し雲がある。南沢をつめる。アイゼンが良く効く。何年か前に、この辺でクマを見たと言われた。小さな滝の上にクマの爪跡を発見。水を飲みに来たらしい。戦慄を感じる。8時20分南岳西尾根に入ると滝谷の側面が眼前に現われ目を奪われる。8時45分南岳小屋。キレット越に見る穂高連峰は青空にくっきりと浮び爽快である。特に北尾根が印象的で末端の屏風は小さく見える。稜線にはところどころに雪があるだけである。9時50分中岳中腹にて昼寝、「なんといい登山日和だ」、岩ひばりのさえずる青空の下でももわず我々はうたたねである。3000mの五月の山の上に居ることを“ふと”忘れそうである。目標の槍は目と鼻の先である。こうしていたい気持ちにムチ打って槍へ“出発”である。10時35分中岳。11時30分大喰岳。槍の肩12時10分槍沢から登って来たパーティーが多く肩は人でいっぱいである。中にはスキーを肩まで上げ槍沢でスキーを楽しんでいる人もいた。13時15分槍ヶ岳山頂、穂先の登りは雪が全くなく夏と少しも変わらない。頂上では360°の展望で楽しむ。薬師、三俣蓮華等の方が雪がたくさん残っている様である。14時飛騨沢を下る。グリセードで楽しもうと思っていたが、雪が腐っている為に思うように滑らず。カップの下を履きシリセードで楽しむ。飛騨沢を登ってくる他のパーティーが我々を羨ましそうに見ているのを尻目に我々は巨大なすべり台でグングン高度を落していく。15時40分槍平に戻る。滝谷の岩壁に雲が掛り一段と威容な姿を見せている。夜もふけてきた。雲が厚く垂れ下がり今にも雨が降りそうであった。

3日 ジャジャぶりの雨 沈殿!

岸本さん数野さん片山さんが14時ごろB a s eに来られる。ずぶ濡れである。小屋に宿まられるとのこと。

4日 相変わらず! ジャジャ降り 沈殿

フライが役に立つ。3Kgの肉を小屋の横に捨ててあるのをありがたく拝借する。槍平の雪原は連日の雨で中央部は大きく崩れ雪解の激流が流れている。夜は風雨が強く明日の下山道が心配である。

5日 起床5時 曇り有難い。7時B a s e出発。滝谷出合7時35分。晴れ間が出だす。連日の雨の為、ここから見る穂高は入山時より雪が少なくなったように見える。

我々は一路新穂高に下る。

我々は天候に恵まれ予定を終了できたので2日間の沈殿こそありましたが満足感に浸っていましたが、入山時から雨ばかりの岸本さん数野さん片山さんには、我々は申し分けなく思いました。

1日 新穂高8時10分-穂高牧場9時-白出沢10時50分-チビ谷12時10分-滝谷出合
12時55分-槍平14時15分

2日 槍平5時15分-南岳8時45分-中岳10時35分-大喰岳11時30分-槍ヶ岳13時
15分-槍平15時40分

5月1日~5月5日

Member 岸本 野上① 野上② 数野 星野 幸内 片山 長島 田中

槍ヶ岳

幸内 義孝

5月1日 晴

新穂高近くなった場所で錫杖笠ヶ岳、それに槍の穂先がチラッと見え ワー! というもうバスを降りなくてはならない。山も高かったが、バス代も一段と高かった。ボン打つとすぐ出発。5分程歩くと右手前方に穂高連峰南岳でも槍は見えなかった。どんどん村道を奥へ、白出沢へ、そこから川をさか登る。2時間程で滝谷出合。

これが有名な滝谷かと思う。ちょうど真中にボウサンの頭のようなのがあった。ドームと聞く。そこで写真を取る。そして一時間程で槍平につく。

5月2日 晴

南岳の登り中腹で滝谷、熊の足跡等があって大変変化にとんでいたのとN₁ N₂さん達が前へ後へといってくれて大変心強かった。

南岳小屋の最後の登り急斜面、ちょっとこわかった。

いよいよ南岳へ登った。と眼前に槍ヶ岳が、何とも言えない感じだった。

今迄、剣岳、立山、針の木岳、中央アルプスからもひとときわ目立つ槍の穂先が目の前にあると思うと胸がはずむ。

中岳ピーク附近でボン打つ。

槍と穂高にばんべいさせて

お花畑で ボンを打つう…………

帰りは帰りで、シリセード キヤッ、キヤキヤ 言いながら下る。登ってくる人がうらやましそうに見ていた。

5月3日 雨 テイタイ

午後にKKK達、雨の中を突いてこられ、話の花が咲いた。天気図取ると明日も雨の予定。

5月4日 予定通り雨 テイタイ

片山さんかわいそうに思う。だがしょうがない。一日じゆうホットケーキを焼く。午後2Kg程の豚肉をひらう。山へ行ってふとって帰ると言いながら大笑い。

その夜、雨風がすごかった。Nは恐かったと、Kは小便がしたくてたまらなかつた、Nは明日どうしたら安全に帰れるだろうかと思っていたそう。後でそのことを聞き皆一同大笑い…………

5月5日

登って来た時とだいぶちがっていた。

登り通った所が川となり通れない。底雪明の跡等、前と全々ちがっていた。でもKK、Nさん達が前へ後となりルートファインディングしてくれ、何にも思わず新穂高へ。

5月の連休は大変楽しい日々でした。ありがとう。

南アルプス ・ 鋸 岳

(S50年5月24日~25日)

雨にたたられた春山山行を無事に終えてすぐにNさんより南ア鋸岳の計画を聞き、平地において暇をもてあましている我ら新人3人も即参加することに決め、大先輩Sさんらと共に、ゴールデンウィークの騒がしさも去った中央線上の人となる。

5月24日(晴) 伊那北→戸台(9:25) - 角兵衛沢出合(12:30) - 角兵衛の大岩(14:20)

伊那北よりの始発のバスには間に合わず高遠行のバスに乗り高遠よりタクシーにて戸台まで入る。途中、雨上り後の新緑に目を奪われると同時に山肌を無残にめぐりとして造られた南アスーパー林道に怒りと悲しさを覚える。戸台で茶店のおばさんの漬物に舌つつみを打ち、2度目の朝食をとりさっそく出発する。角兵衛沢出合までは快適な道を戸台川を右に左にと進む。南アの山々は深いというより毛深いといった感じ3000m近いところまで樹林帯となっている。出合で軽い食事を取り、いよいよ角兵衛沢の急登に一步を踏み出す。まず対岸に渡り左へ左へと尾根づたいに進み、やがて角兵衛の岩小屋を見つ樹林帯を快適に登るとやがてガラ場となる。一步前進二歩後退と云っ

た感じで両側にせまる岩壁と仙丈の優美な姿になぐさめられ、角兵衛の大岩につく。大岩下の岩小屋にてさっそく焚火をし岩ツバメと共に休む。

5月25日 起床(3:00) - 角兵衛の大岩発(4:15) - 角兵衛のコル(5:50) - 第一高点(6:20) - 第二高点(8:15) - 中ノ川乗越(8:30) - 熊穴沢出合(10:30) - 戸台(12:20) - 帰神

昨日と同様ガレの登りである。何十年か後、この山は崩れてなくなるのではないかと思う。あれこれ云ううちに角兵衛のコル、第一高点に進み目前に現われた甲斐駒・北岳・仙丈、それに中央・八ガ岳とに目を奪われる。第一高点 - 小ギャップ(懸垂) - 鹿窓 - 大ギャップ(懸垂) - 第二高点 - 中ノ川乗越と進み快適な岩稜と別れを告げ又しても悪夢のガラ沢下りとなる。ひょっこり出た所が熊穴沢出合でありここで大休止。あとはノンビリ戸台までの散歩道があるのみである。角兵衛沢、熊穴沢共に下部と上部はまったく正反対で可憐に咲く道端の花にさそわれ進み行けば上部は泣く子も黙るガラ場である。男ばかりの今回のパーティーになにか教訓的な山行であった。

パーティー：新川利夫、内藤正司、宮本朋之、幸内義孝、田中正裕、星野辰也

(記・星野)

鋸 岳

幸内義孝

今度の山行は、岩が少しあるとかで期待かつ不安であった鋸岳。

戸台から、角兵衛沢出合迄ほとんど平地である。左手に100米程の岩があったので立ちどまる。角兵衛沢出合より、いよいよ登りであるが沢か尾根かわからない。一時間程でガラ場に出る。一歩出せば、半歩下るといったぐあいであらう登れない。前方が開けているのであせるばかり。ガラ場の歩きづらさを覚える。フーフー言っていると、岩小屋につく。岩小屋には水がポチャポチャ落ちていた。

空を見ると、どんよりくもっていた。明日の天候が気になりラジオをいじくり回す。岩ツバメが大空を素早く飛びかっていた。

早かったがそこでピバーグ、ホットする。

5月25日、3:00起床、で又ガラ場を登る。よく寝たので、元気いっぱいだ。コルよりいよいよ岩と思いきんちょうする。でも思っていたより岩は少なかった。帰りも又ガラ場、熊の沢出合に

着いてS氏の年を聞く。53才とか強いなあをつくづく思う。天候もよく、岩も少しあって、六甲での練習も役に立ち、又年にも負けず頑張っておられるのを見てつくづく感心する。大変、楽しく歩きづらい山行であった。

武庫川 遡行

メンバー 幸内・田中

宝塚の花火大会と夏山合宿の練習を兼ねて、武庫川遡行を行ないました。8月の武庫川はさすがに水も少なく、普段だと壁をへつらないといけない所も、砂地が露出しており、予定よりも早く武田尾に着くことができました。山行の満足感に浸りながら見る花火は、一層、美しく見える様です。

8月1日

S 50.7.25~27日

毛勝三山縦走

メンバー：新川、野上博、田中、幸内

コースタイム：25日大阪アルペン10時50分発

26日 富山、魚津6：25 タクシー7：30毛勝谷（最後の堤迄）15分歩くと雪溪に入る。

10：30分落石に会う、14：00毛勝谷コル（15：00） 16：25釜谷山

17：00テント場

27日（6：10）テント場 7：00猫又山（7：30）7：55猫又山コル（8：00）東

又西又の出合10：00～（11：00）12：15釜谷出合 13：00鬼場倉

14：00刈安谷出合（14：25）15：05ムジナ沢（15：10）15：45取入

出口（16：00）17：00オノマ出合（トラック）17：15前平沢バス停（17：

40）（バス）魚津18：00



みぎまきアザリウ

運命のイタズラ毛勝山

幸内義孝

24日発つ予定がK氏の都合で25日になった。そして25日大阪駅へ行くとK氏はこられないとのことだった。明日の毛勝山を夢見つつ電車へ。富山、魚津へと着く、すぐタクシーへ乗り東蔵へ。又もつと奥へどちらの谷へ入るか迷っていた(東又谷か南又谷)途中タクシーがオノマで東又谷に入ったのでそのまま東又谷へ。タクシーが動けなくなる迄入ってくれたので大変助かった。少し歩いて左岸右岸左岸とわたり朝食を取ってすぐ雪溪に入った。

だらだらとした雪溪を登る一回二回と休けいを取って高度を上げて行く。途中S氏がアイゼン付けて登ろうという、その方が楽だという。そして左岸の石の上でアイゼンを付けながら楽しく話をしていた。その時ゴーと音がした、落石と叫ぶポーとする。S氏が逃げろという合図でいっせいに逃げる。2トン位いの岩が大空に舞い上る、皆の顔、真青になる。ドードーと雪溪を落ちて行く。

おさまってから、ザックの所へもどった。ザックがない。そこらをさがすとシユルトの中に入った。後で気が付いたが逃げたといっても2m位いだったので又皆ゾーとする。行こか戻ろか思案する。行くことに決めて出掛けるとガスが出初めて、何も見えなくなり又落ちてこないかと心配しながら登る。毛勝谷の最後のつめはきつかったがコルにつくと、あの恐怖はどこへやら。お花畑の真中、道もないし、自然そのものだ。テント場をさがし明日の天候を気にしつつ眠る。

次の日は順調に進み、大窓小窓三ノ窓、剣尾根、小窓尾根が見え、再来週のチンネが一段と大きく見え胸をふくらませながら帰る。

比良の思い出

田中正裕

僕にとって比良は、思い出深い山であります。5年前の僕が中学3年の時、キャンプ友達である友人とふたりでなんの気なしに冬の比良へ出かけたのであります。山登りは六甲山位しか行ったことがなかったので。装備は、キャラバンシューズに夏天幕とブタンのコンロだけだったので。花折峠から権現山そして打見山へ出れば、スキー場だし、「なんとかなる!」と安易な山行を決行したのであります。天気もよく、雪の積った稜線越しに見る琵琶湖は私たちふたりの心を弾ませたのであります。この景色の一等よく見え、爽快感の味わえる蓮来山頂で夕暮れと共に過ごそうと夏天幕をPeakに張ったのであります。夜になると風が強くなり、雪も降ってきたのでした。

私たちふたりを暖めてくれるはずのブタンのコンロは、私たちの願いをかなえてくれませんでした。夜中になるにつれて、風雪は強まり天幕はまともに風を受け、6mmのモノクロのステータがブツリ切れたのです。思案した後、私たちは風の弱い所に天幕を移すことにしたのでした。手袋を持っていなかったのです。手は感覚がなくなり無我夢中でした。凍えながらもシユラフに入って寝ていると、夏なので隙間から雪が舞い込んで来るのです。見る見るうちに天幕内は雪に占領されてしまいました。雪まみれになった私たちは、逃げる様に反省と後悔の気持ちで下山したのでした。あれから毎年、私は武奈から権現までの冬の稜線を琵琶湖を眺めながら縦走すると、あの時のコトが思い出されるのです。比良の堂満岳では、逆まに滑落したり、スキーで足の筋を切ったりと、僕にとって比良は身近で思い出の多い山のひとつです。例会での沢のほりで比良の沢を味わい、まだまだ知らない比良の一面を感じられた山行でした。

剣 岳

大 槻 正 之

バスを室堂で下車する。ターミナルはミクリガ池と室堂の間に建つ立山ホテルで、正に時代を象徴するかのように一泊十万円の特別室があるそう。

ひと昔前、称名弘法追分と足でかせいだ苦しさは、今は昔の夢物語り、俺達にとんと縁のない所となった。

始めて雄山に登ったのは二十年程昔の春山で、先輩馬場氏に追たてられた。あの時の美しさ、厳しさが病みつきとなって何年となく、山、山、山で過して来た。体力の衰えた今亦雄山に登るとは嬉しい思い出として残しておきたい。

一の越の登りにひと汗流す。此の先どうなる事か、背中の荷物が肩にくい込む。一足一足が思う様に進まない。10分歩いて一息、15分登って亦ひと休み、あえぎあえぎ登る。人に抜かれるのも覚悟の上、苦勞の末やっと雄山の頂上にたつ。浄土龍王獅子を手前に五色ヶ原越中薬師岳雲の平を経て槍ヶ岳が一望に頭をならべている。今頃本隊は五色を出発して雄山に向っている頃だろう。俺も頑張らなくちゃ！

天気が良いので、雄山のお社も「フトン」を屋根に日光浴、信心気のない頭を下げて通り過ぎると、急に人影が少くなり山らしい気分が出て来る。大汝山のピークで一息入れて写真を撮る。先づまづ今日の行程の峠は越したと満足感でいっぱい。

富士の折立は瓦斯が出て来て富士は見えず。真砂岳へ降り別山との鞍部で早昼にする。

別山に登りつめると、バスの中で一緒だった若い二人にあう。彼等は御前から雷鳥を降るとか、

剣に向う俺に「気をつけて頑張ってください」と励ましの言葉を残して出発して行く。別山からの剣は素晴らしい。剣、剣と何度かよいつめた事が、ザックを枕に何時迄も何時迄も剣を眺めている。

剣沢へ降り御前を横切る。まだ太陽は高いが剣山荘に入る。明日は剣だ。

四時半頃、「食事が出来ました」と起こされる。俺は今日中に三ノ窓へ着けば良いのだ。早起きする事もなかりうに「フトン」の中で頑張る。どたどたと気ぜわしい足音で起き出すと、早やほとんど出発して行く。朝食をとって出発にかかる。

軽装の出発はうらやましい。(実は俺も10K程だが)30Kも肩に掛っている様に感じる。

一服剣で150M、前剣で200M、本峯の登りに200Mと今日は約550Mの登り、ポツリポツリと登り始める。

一服剣は剣御前からの尾根に取付いて、なんとなく一気に登ってしまう。一本たてて迎ぎ見る前剣の眺めは、高くそびえて寄せ付けぬ厳しさがある。正面の夏道をじぐざぐに高度をかせぎ、肩の所から右に廻り込んで頂上に出る。亀の歩みにも似て遅々と進まぬ登りも、いつかの時は誰が何かして等と、想い出にひたりながら、いつかは最後の登りにかかっている。平蔵の避難小屋から愈々くさり場「カニの横這」、よそのリーダーが新人に「くさりにたよらず登れ」と気合を掛けているのも尻目に、くさりにぶら下ってよじ登る。ハーケンをたたく音が心地良く聞こえて来る。何んとあわれな登行5時間余、急がぬ事とは云いながら人の倍は充分掛った様だ。

ビケットで昼食、御一同様と別れて唯一人、長次郎の頭へ向う。雪溪は雪が「ベツタリ」着いている。途中三ノ窓からのパーティーが来て踏跡も充分。雪溪上部のトラバースと岩場に少々嫌な所があったが、登りなければ総て良し、先づまづ池の谷乗越に出る。八ツ峯とチンネが空を圧し、登攀する人々が小さく見える。

チンネの下部で水筒に一杯の水を取り、ビケットを頬張る。KACの連中はまだ着かぬ。雨がバラバラと降って来たので岩蔭に入る。四時の気象通報で台風発生を報じているがまだ遠い。甲子園の野球を聞きながら「シラフ」にもぐり込む。どこかの天幕から浜松の逆転ホームに奇声を発する声がある。どうやら雨も止んだようだ。

枕元を歩く足音に目をさます。食い物はクラッカーだけだ。食欲は無いが今日中にはどうしても下山したい。アタックに出る人達を眺めながらかじりつく、連中であって帰りたいが、宮永君の墓まいりが出来ただけで満足しよう。

池の谷は天幕場のすぐ下から雪である。二股幕営組がどんどん登って来る。何度も登下降した此の道がこんなに長いとは、良くまあ歩いたものよと感心する。

小窓尾根の乗越しに手こずっていると、上の方で岸本君の声がある。立上る元気もなく待ってい

る。地獄に仏と「荷物をかつぎ上げて呉れ」と急に弱気になったが、「あと10M程ですよ」にだまされて、独りポツポツ下山する。長い長い下りの道、だが本当に思い出として心に残る登山だった。

会 員 動 静

○住所変更

幸内義孝 現住所 伊丹市野間字熊野 212-11

留守担当者 竜野市揖保町中臣 322 父・幸内定雄

◎装備係より

装備の点検を行ないますので、会の装備を持っている方はすみやかに返却して下さい。

◎神戸山岳会の歌集が出来ました。黒表紙64pの小冊子です。御希望の方は登山研修所まで、どうぞ。

編 集 後 記

『神戸山岳会が夏山合宿から帰ってくると、夏は終わった』と言って町の人々は季節の変わり目を感じます。

6月に新人を迎え、神戸山岳会の第一関門とも言える夏山合宿を無事終えた彼らの声を盛りこんで、ここに月報678をお届けします。今回は神戸山岳会のヤングからの原稿が集中し、幅広い年齢層をもつ神戸山岳会の特徴を出すことが出来ず残念です。

星野・片山・長島

会員の方々の下記へのご一筆をお待ちしています。

〒657 神戸市灘区上野通1丁目2-35 413号 長 島 安 代